政務活動費活動報告　史跡佐渡金山の世界遺産登録後の取組について

(1)　出席者（会派名・個人名）

公明党彦根市議団：上杉　正敏・中野　正剛

(2)　実施日：　令和 7 年 7 月 21 日（月）・22 日（火）

【１．調査の目的】

(1)　本市における現状

彦根市は今年の７月に、文化庁へ彦根城の世界遺産に向けての推薦状を提出した。これまでの経過を見ても、彦根市はイコモスの意見を忠実に守り、世界遺産登録にふさわしい活動を行ってきた。この推薦状が通れば、日本政府としてユネスコへ、日本の世界遺産登録が進む予定である。順調にいけば、令和９年に彦根城が晴れて世界遺産に登録される。

(2)　本市における課題

世界遺産登録後における観光誘致等の取組については、具体的に進んでいるわけではない。これまでも国内における世界遺産登録後の諸問題について、色々と聞き及んでいる。例えば、登録後の観光誘客減少や、市内開発の制限による市民の不満等がある。

こうした問題を登録前に検討し、今後の課題としなければならない。

【２．調査地選定理由】

(1)　調査項目

史跡佐渡金山の世界遺産登録は昨年登録されたばかりである。こうしたことを踏まえ、一番新しい先進地でもあり、世界遺産登録後の諸問題を聞き出せるのではないかと思ったのが佐渡金山を調査地にした理由である。

(2)　選定地１：新潟県佐渡市

【３．調査結果】

(1)　内　容

今回の調査においては、昨年世界遺産になった佐渡島の金山を初日に現地調査し、翌日、佐渡市役所において意見交換を行った。

佐渡島の金山は、１６世紀末から１９世紀半ば世界の他の地域において採鉱などの機械化が進んだ時代に、高度な手工業による採鉱と精錬技術を２５０年以上にわたり継続した、アジアにおける他に類を見ない貴重な文化遺産である。江戸時代に徳川幕府は手工業を効率化するための管理体制と労働体制を構築し、１７世紀には世界有数の金鉱脈として高品質の金を大量に生産した。これらは鉱山地域・集落地域の遺跡によって証明された。

佐渡島の金山には２つのタイプの金鉱脈がある。西三川砂金山の目に見える金である「砂金」と、相川金銀の硬い「金鉱石」に含まれる目に見えない金がある。これらの金の採掘跡は６００か所を超えるとも言われている。佐渡の金は効率よく生産され、また長期にわたって採掘され、江戸幕府の財政を支えた要因と言っても過言ではない。この金山で働いた職人は江戸時代の最盛期で５万人とも言われている。

明治時代になってからは、機械による近代化が進み金の採掘も効率化されたが、鉱脈も減って行きビジネスに乗らず平成元年に佐渡鉱山が閉鎖された。いまでも鉱山の所有権は三菱マテリアル株式会社が持っていて、将来高度な技術で鉱脈が見つかれば採掘が復活されるのも夢ではないとの事である。

視察２日目は、佐渡市役所会議室において、金田議長の挨拶を受け彦根市からは中野議員から視察受け入れのお礼と視察の目的を述べた。その後、山田のぶゆき市議会議員の同席のもと、畠中観光課長より佐渡島の金山世界遺産登録の経過等の説明を受けた。その後の質疑応答については、国土交通省から彦根市にも出向されていた小林観光文化スポーツ部長に対応していただいた。

佐渡市の世界遺産登録後におけるさまざまな取り組みの中で、観光誘客においては年間６０万人を目標とされている。登録後の観光誘客数は10%アップである。インバウンドでは、台湾、中国が１３９％となりさらに香港、シンガポールからの観光誘客にも力を入れている。観光誘客を増やす戦略として４つの柱を抱えている。１つ目は、文化・歴史・自然と調和した観光を目指す。２つ目は佐渡島独自の高付加価値である陶芸・酒・伝統芸等を紹介する。３つ目は、国内外に通用する佐渡のブランディングを行う。４つ目は、データに基づいたマーケティングに立脚した観光散策の立案をする。これには新潟県とも連携し新潟に誘客して佐渡に来ていただく。また、観光データ調査の分析によりインバウンド向けのアンケート調査を追加する。

佐渡市では、閑散期である１１月、１２月、３月、４月に来てもらうためのプロモーションの強化に努めている。今年の１０月には市長自らフランスに出向き焼き物・酒・伝統芸等をアピールするとの事。交通渋滞対策として相川金山駐車場では、パークアンドバスライドを実施している。近年定期観光バスも利用者減少で廃止されたが、世界遺産登録後観光誘客を推進するため７月２６日～８月１７日にかけて実証実験を実施するとの事。また世界遺産登録をPRする為の展示施設「きらりうむ佐渡」を合併特例債と文化庁からの補助金で登録前に建設された。分散型宿泊施設「NIPPONIA」がTIME誌に掲載され話題となった。おもてなしの取組として２億円を計上し、JALと人材育成教育に関わる連携協定を結びすでに４回実施された。新たな誘客活動として講演会やセミナーも行っている。

(2) 考　察

今回の視察を通して彦根市が世界遺産登録後に実施しなければならないことを数多く学んだ。日本各地で世界遺産登録後における観光誘客を持続可能な限り減少せず維持されている所は数少ないと思う。彦根市においても、世界遺産登録が目的ではなく登録後の遺産の継承を彦根市民の皆様とどのようにして共存することが大切であるかを今回の佐渡島の金山を通して学ばせて頂いた。すでに観光誘客をいかにして取り組んでいくかは滋賀県や近隣市町と連携を取り一部進めていると思う。しかしながら全国の世界遺産登録後における誘客数が減っている所があると言うことは、もともとその場所の魅力が無かったのか又は努力をされなかったのかどちらかだと思う。

彦根城が世界遺産登録になれば、観光客の増加ばかり望んでいては、京都市のようにオーバーツーリズムになってしまう。そうなれば彦根市民としても、喜んでばかりはいられない。この様なことが起こらないためにも、観光客の受け入れ態勢や彦根市民における世界遺産登録の意義を十分理解して頂き、世界に誇れる彦根の城下町を継承していきたい。我々彦根市議会議員もこれからも彦根市民の声を多く聞き、そのことを今後の世界遺産登録に役立てていくことを約束して今回の視察報告とする。

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

公明党彦根市議団：上杉　正敏・中野　正剛

(2) 実施日：　令和７年７月 23 日（水）

【１．調査の目的】

(1) 本市における現状

彦根市での子育て支援施設は老朽化や子どもの人口減少で統廃合が検討されている。

(2) 本市における課題

彦根市での子育て支援施設を今後どのような形態にしていくかが課題

【２．調査地選定理由】

(1) 調査項目

子育て支援施設「子育ての駅」の運営について

(2) 選定地１：　新潟県　長岡市

【３．調査結果】

(1) 内　容

長岡市は人口 25 万人の市で、平成 19 年に教育委員会に「子ども家庭課」と「保育課」を新設し、子どもの施策を統合、母子保健、子育て支援、家庭教育、幼児教育、学校教育、青少年健全育成などを一元的に支援する体制を整備し、保育士が常駐する「子育ての駅」を開設した。

「子育ての駅」は雨や雪の日でも、子どもをのびのびと遊ばせることのできる子育て支援施設が必要との、雪国長岡のお父さん、お母さんからの声からできた施設で、市内に 10 か所あり、多くの親子が利用している。

今回視察した子育ての駅「ぐんぐん」では令和 6 年度で 1 日平均 130 名の入館者があり、屋根付きの運動場も整備されて大きなすべり台も設置されていて、子どもたちが室内と屋根付き運動場で楽しそうに遊んでいた。館内にはミニキッチンがあり、離乳食の実演や試食も好評だとのことだった。そして、全ての子育ての駅に、子育てなんでも相談員「子育てコンシェルジュ」を配置、一人一人に寄り添った相談や情報提供を行い、必要に応じて、専門・関係機関に同行するなど「つなぐ」支援を行っている。

また、子育ての駅は大規模災害時には０歳児とその母親・妊婦を主な対象とした「子育て安心の避難所」になるとのことだった。

(2) 考　察

子育ての駅は雪国の冬場に子どもたちの遊び場がほしいという、要望から開設された施設だが、今では夏冬関係なく利用されていた。また、運営形態は直営と委託の両方で運営されている。

館内では子どもの年齢に応じたおもちゃや絵本などのある場所がワンフロアに配置されていて、子どもたちが自由に遊んでいた。また、授乳室やベッドも設置されており、どの年齢の子どもが来ても過ごせるように設計されていた。

最近では時代の変化か、お父さんと子どもの利用も土日になると３割以上になってきており、お父さんにとっても利用しやすい場所のようだ。

施設で喜ばれている点はと聞いたら、「気軽に来れること」「無料」「一時保育があるのも喜ばれている」との事だった。

子どもの人口が減ってきているので、近年の入館者数は減ってきているとの事だったが、長岡市では移動手段としてほとんど自動車を利用しているので駐車場の確保が課題になっているとの事だった。

また、施設の利用者は固定されているのかと聞いたら、みなさん移動が車なので、各子育ての駅のイベントやセミナーの内容や個人の都合などによって選んでいるので、各館の休館日もずらして、いつでもどこかの子育ての駅に通えるようにしているとの事だった。

子育て支援については、人口減少を増加に転じるためはどうしても行わなければならない施策であり、各市町に合った方法で対応する必要があると思う。

長岡市では妊娠から出産・育児まで切れ目のない子育て支援、長岡版「ネウボラ」を実施しており、彦根市でも施設の統廃合を検討する中、このような子育ての駅の要素を取り入れていくことが必要ではないかと感じた。